

ひだかへんせいたい けいせい 「日高変成帯の形成」



古第三紀前期における東西の島弧－海溝系の衝突によって、ユーラシアプレートの東端は、東側の接合帯下部へ向かって沈み込んでいきました。このことによって、厚くなった接合帯に火成活動が5,000万年前頃に起こり、火成作用・変成作用が行われました。地下深部では高温高圧により岩石の溶融が起こり、トータル岩が発生しました。それは主帯最下部に貫入し、水平滑り面を形成したと考えられています。

主帯は4,000万年～2,000万年前頃にかけて滑り面である日高主衝上断層において北から南へ向かって水平移動したと考えられます。その後、中期中新世前期の1,500万年前以降にかけて、主帯が東に急傾斜で傾き西帯と右横ずれ運動を伴って接し、西へ向かって衝上していきました。そして、接合衝上帯は約500万年前には陸上へ姿を現したと推定されます。

更にこの後、顕著になってきた千島弧の西進によって北海道中央部では更に圧縮テクトニクスが作用し、北海道の背骨といわれる日高山脈を形成していったと考えられます。

(学芸員 向井 正幸)

地学シートHP



旭川市博物館HP



地学Sheets

Asahikawa City Museum